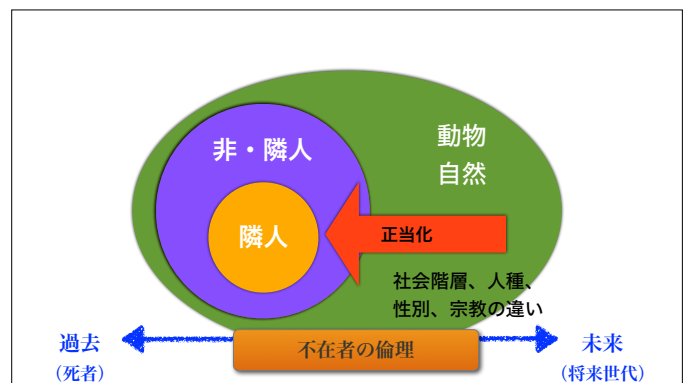




Overview

- なぜ「動物」か？
- 動物と宗教
- 一神教および西洋文化における動物観
- 「動物の神学」の形成
- まとめ（問題提起）

なぜ「動物」か？



日本における伝統的な動物観・生命観

- 東アジア一帯で行われていた祈雨等のための**動物供犠**が日本では姿を消し、反対に放生や殺生禁断令が、その目的のために採用された。
- 仏教以前の土着的観念の上に、仏教的な**輪廻思想**と**不殺生**が作用した。
- 古代社会では立春から秋分まで死刑が禁じられていた。人間のいのちと動物のいのち、自然のいのちは根源においてつながっていると理解されていた（**アニミズム的生命観**）。

近代における動物と人間の「対称性」の崩壊

- 日本には、動物と人間の共生を語る昔話が多数存在する（特にアイヌの神話）。人間と動物は会話をし、結婚し、仲間となる。人間が動物を犠牲にしなければ生きていないことに対する痛みと感謝をおぼえる回路を、かつては持っていた。
- 技術力の進展による、動物と人間の「対称性」の崩壊、そして動物の家畜化。

現代における問い

- 動物・自然に対する一方的な支配（搾取・大量殺戮）は正当化されるのか？
- 自然破壊・環境汚染。鳥インフルエンザ・口蹄疫等に感染した動物の駆除。害虫・害獣の駆除。実験動物の殺傷。飼い主に放棄された犬猫の処分。皮革（靴やコート）のための動物殺傷。
- 食べ物（動物）の生産・消費は、人間の欲求と共に増大していったのか？
- 食のタブーや動物供養は「**食の倫理**」を担っていた。

動物と宗教

媒介としての動物

- 超越的なもの（世界）と人間をつなぐ媒介としての動物（穀物）
- 人類史的な尺度から見ると、動物供養を中心とする犠牲の祭儀（供養）が「宗教」そのものであった。
- 日本、中国、朝鮮半島に事例について、原田信男『神と肉——日本の動物供養』（平凡社、2014年）を参照。

供犠の文化

- 犠牲獣（victim）の破壊を通じて神が顕在化。
- 殺す文化
- 神と人の非連続性
- 一神教文化

供養の文化

- 神（々）との共食（動物・穀物）を通じて神が顕在化。
- 食べる文化
- 神と人の連続性
- 多神教文化

【参考】中村生雄『祭祀と供養——日本人の自然観・動物観』法蔵館、2001年

宗教学の人間理解と近年の探求

- 西欧の宗教学では、人間と動物を分けるものとして「宗教」を規定した（デュルケーム、エリアーデ等）。
- 宗教の起源：「動物性」の終わり
- 近年における人間の起源の探求：**人間と動物の連続性**の発見
- 遺伝学、霊長類学、考古学、社会人類学、進化生物学などを通じて

一神教および西洋文化 における動物観

一神教における動物供犠（犠牲）

- ユダヤ教
 - バビロン捕囚（前6世紀）以前（神殿を中心とした動物供犠）、以降（動物供犠+律法）、第二神殿の崩壊（70年以降）以降（律法）
- キリスト教
 - ユダヤ教とのライバル関係の中で、非犠牲（供犠）的な集団として出発。それゆえ、ローマ帝国からは「無神論」的な集団と見なされた。
- イスラーム
 - 犠牲祭（マッカ巡礼のクライマックスの日である第12月の10日）では、羊などが屠られる。イブラーヒーム（アブラハム）が息子イスマーイール（イシュマエル）を犠牲にしようとした伝承（Q37:102-107）に基づいている。

西洋における動物観（キリスト教前史）

- ピタゴラス学派、オルベウス教、犬儒（キュニコス）派
 - 輪廻転生の考えを持ち、動物供犠を拒否。動物も人間も魂を持つと考えた。
- マニ教
 - 輪廻転生の考えを持ち、植物を動物より高次にあるものと考えた。植物の方が、より霊的な要素を持つと考えた。
- ストア学派
 - 人間だけがロゴスを有するとし、動物との違いを強調した。

初期キリスト教の動物観

人間と動物の根本的相違（旧約聖書とストア学派の影響）

動物供犠の廃止（屠殺の世俗化）

メタファー（隠喩）としての動物の利用

「動物の神学」の形成

「動物の神学」に至る経緯

- 動物の「魂」や「権利」をめぐる議論の蓄積 【理論】
- 西洋キリスト教では、伝統的に魂は人間の専有物として考えられてきた。
- 動物の「魂」をめぐる議論の歴史は長い。
 - 池上俊一『動物裁判』（講談社現代新書）1990年。
 - 金森 修『動物に魂はあるのか』（中公新書）2012年。
- 動物のための礼拝（1970年代以降） 【実践】

聖書の動物観の一例

- 人間に臨むことは動物にも臨み、これも死に、あれも死ぬ。同じ霊を持っているにすぎず、人間は動物に何らまさるところはない。すべては空しく、すべてはひとつのところに行く。すべては塵から成った。すべては塵に返る。人間の霊は上に昇り、動物の霊は地の下に降ると誰が言えよう。（コヘレトの言葉 3:19-21）

東方キリスト教における理解

- 【参考】ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』（原著1880年）におけるゾシマ長老の言葉
- 兄弟よ、人々の罪過を恐るる勿れ。罪過のただ中にある人間を愛せよ。なぜなれば、これはすでに神の愛にあやかかるものであって、地上における愛の頂上にほかならぬからである。ありとあらゆる神の創造物を、全体としても、はたまた各部分としても、なべて等しく愛するがよい。一枚の木の葉、一条の日の光をも、もれなく愛するがよい。**動物を愛せよ**。植物を愛せよ。ありとあらゆる物象を愛せよ。一切の事物に愛をそそぐならば、そこに神の秘密を発見するにいたる。（続く）

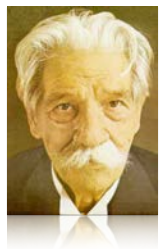
而して、ひとたびこれが発見したからには、もはやその後は毎日、毎時、毎分、いよいよますます、たえずその認識を深めるようになるであろう。かくてついに、完全無欠な、全世界全人類的な愛によって、この世を光被するにいたる。**動物を愛せよ**。かれらには神が思想の源と、平安なる喜びとを与え給うたのである。かれらを憤激に駆り立てる勿れ。**苦しめてはならぬ**。かれらから喜びをうばいとはいけない。神の心に抗してはならぬ。人間は動物の上に立って、傲然と構えるべきものではない。かれらはすべて罪過なき存在であるが、これに反してわれわれ人間は、偉大な稟体を具備しつつも、おのが出現によって大地を腐敗させ、その腐爛せる足跡を、あとにのこしてゆくのである。ああ、嘆かわしいかな！ われわれはほとんど各人みな然りである！

動物愛護運動の先駆者たち

- 1824年、アーサー・ブルーム Arthur Broome（英国国教会の司祭）らが王立動物虐待防止協会（The Royal Society for the Prevention of Cruelty to Animals）を設立。キリスト教の慈愛の精神が、動物にまで拡充されることを願った。
- 1915年、日本人道会の設立。メアリー夫人（新渡戸稲造の妻）らが中心になった動物愛護運動の先駆。後に戦争により活力を失っていった。

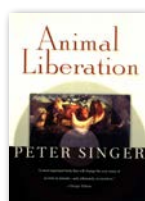
Albert Schweitzer（1875-1965）

- 生への畏敬の倫理（ethics of reverence for life）
「私は、生きんとする生命にとりかこまれた生きんとする生命である」という事実（『文化と倫理』（著作集第七巻）311頁）
The most immediate fact of man's consciousness is the assertion "I am life that wills to live in the midst of life that wills to live."
- 生命中心主義（biocentrism）の先駆者的役割を果たす。



Peter Singer (1946-)

- 『動物の解放』 *Animal Liberation*, 1975
- 功利主義（最大多数の最大幸福）の視点から「**種差別**」（**speciesism**）を批判。
- 人間以外の感覚的存在者（sentient being）も最大多数の中に算定される資格を持つと考える。**感覚性**（**sentientcy**）を有する限り、人間であれ動物であれ、平等な道徳的配慮がなされるべきであると主張する。動物実験の批判。肉食主義のすすめ。
- ユダヤ・キリスト教の人間中心的な考え方を批判。



動物の神学の論点

「私が示唆したいのは、**権利の概念**は道徳神学と十分に両立するものであり、それは動物をも含むように正しく拡張されるのが正しいということである。同時に私は、権利の言語は動物に関する神学的視点から述べられる全てのことを網羅するというような考えに抵抗する。私の考えでは、動物の価値を尊敬し、神に与えられた動物たちの権利に責任をもち、それらを認める正当な理由が存在するのだ。」（A.リンゼイ『神は何のために動物を造ったのか——動物の権利の神学』教文館、2001年、20頁）

苦しみが人間以外の世界に存在するという認識は、これらの領域のための贖いの問題と取り組むことをも要求する。（中略）なぜなら、問題はどの位、あるいはどの程度あらゆる存在が苦しむのかということではなく、どの存在も苦しむということであり、そのことが取り組まねばならない基底の問題なのである。もしボンヘッファーがかつて言ったように「**苦しむ神だけが助けることができる**」のならば、次のような結論になる。苦しみのあるところではどこでも——苦しみの種類と程度がどんなものであるうとも——神もまた苦しむのである。（同書、105頁）

「我々が動物にたいして義務をもっているという道徳的には満足すべき解釈は、ある動物解放主義者によって勧められているような、動物をも同等に考えるべきであるという主張に単に留まっていられないのである。イエスの人格によって示されている神的愛という考えに基づいて私は次のように提案する。すなわち、弱者と無防備なものは同等なのではなく、より大きな考慮を与えられるべきである、と。**弱者が道徳的優先権を持つべきなのである**」（同書、64頁）。

まとめ（問題提起）

- 人間を特権化する近代的「宗教」概念の再考
- 文化ナショナリズムに陥らない動物観・生命観の総合
 - 動物の権利（西洋）——自立した身体理解（身体の所有）
 - 生命の連続性（日本）——流動的な身体理解（間身体的生命）
- 人間の「動物性」（身体性）を自覚した人間観・歴史観の形成
 - 食の倫理
 - サクラメント（神人共食、命の分かち合い）の生態学的次元